

御遺文にあらわれたる下種思想

(前號續)

武 田 海 正

3. 性 乘 二 種

性種とは人々に本來具つてゐる佛性であり、乘種とは覺者が人類の心田へ下種する佛種であるといつてすましておこならば何も問題はない。しかるに今は通佛教的佛種問題をのり越えた久遠の本覺種を性乗二種の尺度ではかつてみようとするのだからむづかしい。

本覺種を性種であるとすれば性種とはあらゆる生物が本來具有してゐた佛性といふことになるから、別に本覺者によつて下種してもらわんでもよろしい。もし單なる乘種とするならば久遠の下種も大通下種もその他の下種もその價値に於て皆等しいものになるであらうから久遠下種だけを特に稱揚する必要はない。

常識的に考へれば佛性は衆生本具のものであり、佛種は佛のものであつたにちがひないが、本覺種の場合はずでに無始久遠を論ずるのであるから体の佛種と体の佛性とは同じものであるとみななければならぬ。体の佛種と体の佛性とは同じものであるといへば久遠下種以前には衆生に佛性といふものがなかつたのであらうか。そういう疑問は本覺種の下種がすでに無始久遠に行はれたものであるといふ事を忘れて久遠以前にも何かあつたかの如く思惟するから起るのであつて、事實久遠以前といふものはないのである。佛種と佛性とは同一であるといひ得るのはたゞ久遠下種だけである。久遠下種からみれば衆生本具の佛性といつても覺種が人々の心田に殖えてあるといふ事にすぎないが、久

遠下種以外の下種からみれば衆生本具の佛性とは衆生に無始以來恒存してゐた佛性となり、それを開覺するのが目的だといふ事になる。

天台一家ではこの久遠下種の覺種を性種と解釋してゐる。それは無理もない。もとく天台の三益論は今眷迹門脱益の衆生實益論に立脚し、今番脱益の化源を三千久遠の大通下種と定め、その時の佛種だけを乘種と解し、その他の下種の佛種を悉く性種としてゐるのであるから。

其中衆生悉是吾子——性德佛子非善非惡——十六王子覆講法華時間法者——即成了因性——文記會二七ノ一一これに對して當家では久遠下種の本因佛種を性乘不二の本覺種と解するのである。こゝで性乘不二といふのはたと性乘並存といふ意味だけではない。性種に即する乘種、本覺に即する始覺的な佛種といふ事である。性種の大地に深く根を下ろし高く乘種の空中に花をつけ實を結ぶ具体的な本覺種を指すのである。本覺種は單なる非因果の性種でもないし、又單なる因果の乘種でもない。その種体は因果を越えた本覺に立脚してゐながら、因果的に現世へ實現して來る極めて宗教的なものである。

もとく性乘不二ならば性乗何れかといふ疑問は起らぬ筈なのに、なぜか或は性種にみえ、或は乘種にみえるのであらう。それはたと觀点の相違、立場の相違によるのであつて種そのものゝ相違によるのではない。下種する覺者からみれば諸他の佛種は勿論久遠の本覺種でも乘種である。問題は下種された幾類、下種された人々の方にある。下種された人が壽量品の不失心者であり日向記の孝子であり開目抄の信心了因の子であるならば久遠下種は乘種であつたと思ひませう。下種された人が久遠の失心者であり不孝の子であるならば性種であつたといふにちがひない。迷つてゐる人は久遠下種などかつて被つた事がないと思つてゐるから、本當は自分の心田に覺種が殖えられてあつてもそれ

を信じない。彼自身は信じないけれども第三者からみればちやんと佛種が心田の中に殖えつけられてゐる。

かういふ場合は久遠下種は性種の價値しかあらわれてゐないから性種であるといはれるのである。

しかるにこの迷つてゐる人に向つて君の心田にはすでに覺種が殖えられてゐるのだと告げる人があれば、その聲をきいてもしその人があゝそうだつたかといつて自分の心田に久遠以來殖えられてゐた覺種に氣がつくならばその時は性種に即する乗種の開覺をみるから本覺に即する始覺の覺りを開くことができるのである。酒に酔つてゐる友は衣に寶珠をつけてゐながら貧乏してゐた。しかし酔がさめて衣裏の寶珠をみつけた時は百萬長者になつた。久遠の覺種に氣づかぬうちは性種性得の寶珠であつたのが氣がつくと同時に性来不二の修得の寶珠となるのである。

御義上に云く

龍女が手に持てる時は性得の寶珠なり。佛受け取り玉ふ時は修得の寶珠なり。中にあるは修性不二なり。七九

四、久遠下種

1、經說

久遠下種の妙相は法華經の如來壽量品にとかれてゐる。それによると五百億塵点の久遠元初本覺者自ら全人類へ一大秘法の本覺種を下種されたのである。本覺者の出世の本懷は一切衆生皆成佛道の大理想を實現し全人類をして我と異なる事なからしめんが爲であつた。

衆生救濟の根本誓願たる每自悲願の不行は藥師の十二願・普賢の十願・彌陀の四十八願・悲花經の釋迦の五百大願法華經の能爲救護の大願等あらゆる三世十方諸佛の本願別願を悉く綜合統一しそれらに超越せる總本願である。

この本覺者の大願を象徴的に人間のことばをもつて表現したのが壽量品の良醫譚である。

たとへばこゝに一人の良醫がゐる。この良醫は智慧があつて非常に情深い人であつた。それでよく藥の良否を見分けたり、上手に藥を調合したりした。

それだからどんな難病でも治せないといふ事はなかつた。その良醫には百人の子息があつた。或る時この父は他村へ診療に行つた。そのるす中に子供達は藥室へ入つて毒藥をのんだ。やがて毒が全身にまわり悶亂して大地の上をころがつて苦み初めた。父が我家へ歸つてみるとこの有様である。毒をのんだ子供の中には毒の爲にすつかり本心を失つてゐる者もある。まだ本心を失はないでゐる者もある。子供等は父の姿をみてたいへん歡び

今私共は毒といふことを知らないで誤つて毒をのんで苦しんでゐるのです。どうか病氣をなをして、もつと壽命を與へて下さい。

とお願ひする。父は子供等の苦しんでゐるのをみて色の美しい香のよい味もよい藥草を集めて調合し、子供達に向つて

この良藥は色も香も味もよい。さあおのみ。毒の病などすぐなをるよ。

といつて藥をすゝめる。子供らの中で本心を失はなかつた者はその藥が色香味がよいのをみてすぐにのんだから全快してしまつた。しかるに本心を失つた者は父が歸つて來たのをみて、歡んで治療を求めたのだけれどもせつかく父が藥を與へるとそれをのうともしない。それはあまり深く毒に犯されてゐて色香味ともよい藥をよい藥と信ずることができなかつたからである。父はこれを見て

彼等は毒にあてられて心がみな顛倒してゐる。私をみて歡んで治療を求めながらかような大良藥を與へるとのもう

ともしない。私はある方便を用ひてもこの薬をのませてやらねばならぬ。と考へ、子供等に

私はこの通り老ぼれてしまつたから死ぬのも遠くはあるまい。この薬はこゝへのかしておくから自由にとつておのみ。のめばきつと癒るぞ。

よいつて又他村へ行つてしまつた。そこで使を遣はして

お前等のお父様は死んでしまつたよ。

と告げさせる。子供等は父が死んでしまつたといふ事をきゝ悲歎にくれ

お父様がおはしたならば私共を一層可愛がつて下さつたであらう。今やお父様は私共をすてゝ遠い處で亡くなつてしまつた。私共は依り所のないあわれな孤兒となつたのである。

と思つた。あまり深く悲しんだ爲に迷へる心が自ら醒めて、父のおいて行かれた是好良薬に氣がついて服用した。良薬の力でさすがの重病もたちどころに全快したのである。その時父は子供等がみな全快した事をきいて再び歸宅し事の始終を物語り、もと通り一家平和な生活をつづけたといふ事である。

この壽量品の譬説を法門によせて因果論的に組織したのが久遠下種の法門である。本佛の無縁の慈悲より起る全人類救済運動はこの久遠下種を化源とし、本迹二門に脱益を示し、靈山下種に進んでは正像を利し、文底に種を留めては末法下種を展開して現今の人々に即身成佛の大果を結ばしめるのである。

2、良醫譚の意義

壽量品譬説の良醫とは本佛釋尊のことである。

日向記云 良醫とは教主釋尊、智慧とは八萬法藏十二部經なり。 五七

釋尊は父なり。 五五

良醫の子とは久遠以來本佛の子たる私共のことである。

日向記云 悉是吾子の子は孝不孝を分別せざる子なり。 五四

我等衆生は子なり。 五五

この子の中には毒をのんで本心を失つた者もあり、亦本心を失はないものもあつた。その失心の子とは久遠下種の佛種を忘れた者であり、不失心の子とは本覺者を信じた法華經の行者のことである。

日向記云 爲治狂子故の子は久遠の下種を忘れたれば物にくるう子なり。仍て釋尊の御子にも物に狂う子もあり、不孝の子もあり、孝養の子もあり、所謂る法花經の行者は眞實の釋尊の御子なり。 五四

毒藥とは他宗余教の教義であり、毒をのむとは邪法を信ずる事である。

御義云 他とは念佛禪眞言の謗法の比丘なり。毒藥とは權教方便なり。法花の良藥に非ず。故に悶亂するなり。悶とはいきたゆるなり。壽量品の命なきが故に悶亂するなり。 九四

毒をのんで本心を失つたとは父本佛を忘れ、久遠の下種を失つた事である。

御義云 本心を失ふとは謗法なり。本心とは下種なり。不失とは法花經の行者なり。失とは本とあるものを失ふ事なり。 九五

是好良藥とは一大秘法の南無妙法蓮花經の事をいふのである。

本尊抄云 是好良藥壽量品肝要妙法蓮花經是也。 九四四

——こゝまでは久種近脱を含む久種現脱の説で、こゝから下は末法下種義を密表してゐる——

こんなによい薬を與へてもまぬというのは權乘への執情が強過ぎて本佛が與へた一秘の妙法を信じない事である。

御義云 毒氣深入とは權教謗法の執情深く入りたる者なり。之によつて法華の大良薬を信受せざるなり。九六
父が子供に向ひ

是の良薬を今こゝに留めておくからお前達は勝手に取つてのむがい。

といつて他村へ行かれたといふのは末法萬年の衆生の爲に覺者が一秘の妙法を壽量品の文底に留め御入滅遊ばされたといふ事である。

御義云 今留とは末法なり。此とは一閻浮提の中には日本國なり。汝とは末法の一切衆生なり。取とは法華經を受
持する時の儀式なり。服するとは唱へ奉る事なり。九六

使を遣はして父が死んだと告げしめたといふのは本化上行日蓮大菩薩を日本國へつかわし本覺者の非生現生非滅現滅の理を示し、常住此説の妙法を宣傳せしめる事をあらわしたものである。

本尊抄云地涌千界末法始必可出現今遣使還告地涌也。九四四

御義云 法華經の行者は如來の使に來れり。五九

以上の宗義を簡單にまとめてみれば、父たる本佛釋尊が久遠の大占から十界の衆生の八識心田へ一大秘法の本覺種たる南無妙法蓮華經を殖えておかれたのである。しかるに下種された人々の中にはいち早く自己の心田中に覺種が殖つてゐた事に氣つき發心して覺つた人もあつたが、中にはいつまでも何時までも自己内心の覺種を忘れて六道の苦界に輪廻してゐた人もあつたのである。父の與へた妙法の良薬をのんだ人は早く妙覺の位に昇つたのであるが、ひどく邪

教の毒にあてられた連中は今なを六道の苦界にころがつて苦しんでゐるのである。この人々を救はんが爲に如來使たる地涌の菩薩が人間と生れかわつて來たのが日蓮聖人であるといふ意味である。

3、下種の教主

久遠以來三世十方にわたつて無量無邊の下種が行はれた事であらう。三千久遠の大通佛時代には十六王子によつて大通下種が行はれたといふ事實が化城喩品に説かれてゐる處からみると、無始久遠以來三千久遠までの中間に於てもその當時の十方寶土で無量無邊の下種が行はれてゐたといふ事は想像するにたたくない。それから大通下種以後にも靈山下種や末法下種があるのだから久遠劫來未來永恆にわたつて無盡の下種が行はれており、又行はれる事であらうそれらの下種は皆それ〴〵下種の教主によつて行はれるものであるから下種の教主も下種の數にしたがつて無數に存在するわけである。

しかし壽量品の精神からみれば燃燈佛等も本覺佛の一分身佛であるといふ事になるから三世十方の下種の教主たる諸佛如來も悉く本覺佛の分身散体であるといはなければならぬ。さうすると三世十方のあらゆる下種もその當分々々の佛の下種ではなくて、そのもとをたどせば本覺佛の下種であつたといふ事になるのである。

その本覺佛が一番最初下種したのを久遠下種といふのであるから、この久遠下種はあらゆる下種の中心主体であり根本生命であるといはなければならぬ。久遠下種は全法界の一切衆生に下種したものであるといふ立場からみると分身散体の諸佛の下種は久遠下種の上に更に下種する重復の下種になりはしないかといふ疑問が起つてくるが、これはどう解釋したものであらう。それは久遠下種の下種といふことをしばらく用ひたのであつてその内容を探究すれば久遠下種だけ本當の下種益であつてその他の下種は熟益に該當するのである。

三世十方のあらゆる下種を統帥しそれらの教主を統一せる久遠下種の教主は無始久遠の古佛であり無作三身の本覺佛である。骨董品でさへも古ければ古い程高くられるのである。下種の教主の壽命が長遠であるといふ事はその教益が擴大無邊であるといふ事をあらわしてゐるのである。無始以來本覺者自ら覺種を下ろして人類を救濟するばかりでなく三世十方に身を分けて無邊の衆生を教化してゐるのである。さういふ風に無限の教益を施すにはどうしても久遠以來の古い佛でなくてはできないのである。そこで古い佛程無量無邊の弟子と信者とを有してゐるわけだから古い佛程尊いといはなければならぬのである。本覺佛はたと古いばかりでなく一身にして無量身を現じ無量身にして一身を現する無作無碍の自在身を有してゐるのである。

本尊抄云 教主釋尊五百塵点已前佛也。因位又如是。自其已來分三身十方世界。演說一代聖教。教化塵數衆生。九三四

日眼女抄云 釋尊は天の一月、諸佛菩薩は萬水に浮ぶ影なり。 一八三一

4、三・五下種の本義

大根や菜の種であれば畑に殖えても種が未熟だつたり耕地や湿度などが適合してゐなかつたりするとその種子が發芽しないうちに途中で朽ちてしまふ事がある。佛種には決してさういふ憂はない。少くとも佛種は無限の壽命を有せる久遠の本覺者の大智慧と大慈悲との結晶体であつて、その中には久遠の生命が脈うつて流れてゐるのであるから絶對に枯死するような事はないのである。無始久遠の元初本覺者が下種したといふ妙覺の種子は全人類の識田に殖えつけられたまゝ永劫に生きてゐるのである。

文句記云納種在識永劫不失 會本ノ二三、五〇

御義云 妙法に結縁すれば億劫にも失せず。 一六三

一度殖えられた種子は永恒に生きてゐるとすれば途中でどんな事があつても枯れたり失はれたり無くなつたりしないわけであるから再びその上に下種する必要はない。しかるに天台あたりでは久遠下種以後に更に大通下種などを立てゝゐるのはどうしたわけであらう。久遠下種の上に再び下種しなければならない何等かの理由があるのだらうか。天台では下種の佛因を正了縁にわけて久遠下種を正因の下種とし、性乗二種にわけては久遠下種を性種としてゐるから、どうしても大通下種を立てゝ了縁の下種を行ひ、乗種の下種を全うしなければならなかつたのである。天台で大通を下種といふのはかように迹門立脚の立場からみて當然のなり行としなければならぬ。しかるに日蓮聖人も三五の下種などと仰せられてゐる處もあるから、本門立脚の宗義から大通を下種といふ理由があるのであらうか。それは嚴密な意味では大通を下種と稱する事はできないのであるが、久遠下種を開發する爲の發心の下種といふ意味ならば大通下種といへない事はない。又ことばを簡にする爲に三千久遠と五百久遠とを並べ稱して三五の下種といひあらわす事もありうるから、その場合は三五下種といつてもたゞことばのあやにすぎない事になる。だからことばの上は三五下種とあつたからといつてたゞちに久遠下種と同格に大通下種を下種として認めてゐるのだと思つてはならない

日向記云 三五下種の法門なり。 七四

太田抄云 三五下種の輩也。 一〇九六

迹門當分の天台一家の立義にしたがへば大通下種も立派に下種として通用する。けれども一度本門立脚の我家の宗義からみれば迹門の大通下種は結縁または熟益とならなければならぬのである。

本尊抄云 久種を以つて下種となし大通前四味迹門を熟となす。 九四二

久遠下種大通結縁。 九四四

國家論云 彼の久遠下種大通結縁の者の五百三千の塵点を經るは法華の大教をすて、爾前の權小にうつるが故なり
二四六

富木抄云 大通結縁の輩は衣珠を忘れ三千塵劫を経て貧路に踟躕し、久遠下種の人は良藥を忘れて五百塵点を送り
三途の險地に顛倒せり。 一三八四

要するに下種を本門に約すればたゞ久遠下種だけが眞正の下種となり、その他の三世十方諸佛諸菩薩によつて行れる又行はれるであらう全法界のあらゆる下種は悉く熟益となつてしまふのである。

しからば當家に於て久遠下種の上に更に末法下種を主張するのはどういふわけであるか。すでに久遠下種は性乘不二の妙覺の種子を下種したものであるとするならば、更にその上に重ねて下種する必要はないではないか。それはまことに興味ある問題であり、本論の眼目ともいふべき好題目であるから、くわしく書いてみたいものである。

五、末 法 下 種

1、末法下種とはどういふ下種か

久遠に下種された人々の中で最上根の人々は過古世に覺者となり、近世に熟脫の益を得、大通下種の輩は迹門に來て如來となり、久遠下種の中根の者は本門で脫益を得たのであるが、なを熟脫の益を得ないで末法まで流れてゆく最下根の人がある。それらの人に對して釋尊は壽量品の文底に一大秘法の大良藥たる妙法の覺種を秘藏されてのこされたのである。この文底秘沈の良藥の妙法を末法に如來使として應現せる本化地涌の菩薩が宣布する事を末法下種とい

ふのである。全人類が久遠の元初から下種益を蒙つてゐるのだから今頃は皆んな覺りを開いて脱益を得てゐるのが當然であるのにどうしてかうも迷へる人々が多いのであらう。なる程下種は十界平等に被つたのであらうが、その覺種を下ろされた人々の心田に差別があつて良田ばかりではなく惡田や荒地などがあつたからその熟脱にも遲速ができたのである。壽量品の不失心の一類は過古世近世、或は大通迹門、或は本門や正像時代にすでに熟脱の益を得てゐるのに、余失心の連中は久遠の寶珠を忘れ妙覺の種子を失つて末法の今日まで流轉して來たのである。久遠下種を忘れたり妙法の覺種を失つたりする様な最惡劣機の衆生には先づ折伏逆化の超悉檀根本大化を施して久遠以來忘失してゐた佛種の覺醒運動をしなければならぬのである。そういふ化導を末法下種といふのであるから、末法下種とは下種される人々に約してしかいふのであつて佛心に約して末法下種といふのではない。

正法千年像法千年すぎおはつて末法時代に生れた私共は皆久遠の失心者であるから父本覺佛に背き久種の珠を忘失したところの不孝の子であつたのである。せつかく父本覺佛から頂戴した久種の珠を忘失するような馬鹿者には尋常一様の教法や普通の化導法を用ひても何等の反響を齎らさないであらう。そこでぐわんと一つ鐵拳をくらわす必要がある。それを折伏といふのである。その折伏逆化の教線をはり唯一佛乘の妙法を唱へ無始已來の彼等の邪法に對する執情を蹴飛ばして久種の覺芽を開發せしめるのが末法下種の大行なのである。

開目抄云　しらす大通結縁の第三類の在世をもれたるか。久遠五百の退轉して今に來るか。　七六八

本尊抄云　末法の初は謗法の國にして惡機なる故に之を止めて地涌千界の大菩薩を召して壽量品の肝心たる妙法蓮花經の五字を以て閻浮堤の衆生に授與せしめ玉ふ。　九四二

御義云　在世は脱益、滅後は下種なり。よつて下種を以て末法の詮となす。　九二二　以下次號